

# *The Times*のヘッドラインの変化に関する一考察

## A Study of Diachronic Change in the Headlines of *The Times*

野 波 侑 里  
NONAMI Yuri

### 0. 序

イギリスの高級紙 *The Times* は、1785年創刊以来、約200年以上に亘る長い歴史を持つ名実共にイギリスを代表する新聞である。*The Times* は、1785年1月1日、*Daily Universal Register* という名で創刊され、1788年には現在の *The Times* に改名された。創刊当初は、紙面4ページの小さい活字のみの新聞であったが、現在では数十ページに亘り、写真や漫画、様々な書体の活字を織り込んだ視覚的にも洗練された新聞となっている。この200年の間には、歴史上の様々な事件、革命、戦争が起こり、それらを日々の記事として記録しているという意味において、*The Times* は歴史的にも価値のある貴重な資料であることは言うまでもない。イギリスの新聞では *The Observer* が1791年の創刊から現在まで、日曜版の週刊紙として長い歴史を持つが、他の新聞は創刊と廃刊を繰り返しており、日刊紙として *The Times* は他の追随を許していない。

本稿は、この200年間の *The Times* のヘッドラインに焦点をあて、そのヘッドラインの特徴、また言語的な変化を概観することが目的である。

### 1. 先行研究

マルチメディアの発達と共に、メディアの英語に対する関心は高まり、それに関連する書物は多数出版されている。新聞のヘッドラインのみを扱った研究として、Straumann (1935) は、世界の主要な新聞のヘッドラインを文構造から分類してその特徴を検証し、また歴史的な変化についても考察を加えているという点において注目に値するが、出版年が1935年であり近年の変化については考察が行われていない。Mardh (1980) は、*The Times* と *Daily Mirror* のヘッドラインの相違点について文法的な分析と共に数量的な分析を行っているが通時的な考察は行われていない。

次に、1785年から現在に至る時代を英語の歴史上で区分すると、1700年以降の後期近代英語 (Late Modern English) から、20世紀以降の現代英語 (Present-day English あるいは Contemporary English) の時代に相当する。時代の歴史的変化に関する研究としては、

Barber(1993)、Fasold *et al.*(1989)他、多数の著書があり、特に現代英語の変化についてはBarber(1964)が、語彙面、音声面、意味、文法の変化に分けて明快に論述している。

さらに、新聞の言語という言語使用域については、Biber *et al.*(1999)がコーパスを使用した英語の文法分析をする際に、“conversation,” “fiction,” “newspaper language,”そして“academic prose”という4つの言語使用域に分類して考察を行っていることからわかるように、近年では新聞の言語が一つの特徴的な言語使用域として確固たる位置を占めていることがわかる。

以上のようなヘッドライン、英語の歴史的変化、新聞という言語使用域の先行研究をもとに、特に本稿ではThe Timesのヘッドラインに焦点を絞って初刊から現在までの通時的な考察を試みた。

## 2. 調査の方法

今回は調査の資料として、1785年から1985年までの約15,000点のオリジナル記事をCD-ROMに収録した*Changing Times*と、1785年及び1800年から1980年まで20年毎の1月1日に発行された、マイクロフィルムに収録された新聞記事を使用した。

考察にあたって、時代区分は約50年間を区切りとして、1785年から1849年、1850年から1899年、1900年から1949年そして1950年から1999年の4つの時代に区分して考察を行った。

## 3. 考察

### 3-1 1785年から1849年

まず創刊の1785年から1849年までの65年間の変化について概観してみることにする。創刊当時の新聞は、紙面の総頁は4頁で、1頁から2頁にかけては殆どが広告であり、実際の記事は極めて少ない。当時の最も典型的なヘッドラインを下記に列記した。

FOREIGN INTELLIGENCE.

PARLIAMENTARY INTELLIGENCE.

LATEST INTELLIGENCE.

当時のヘッドラインは現代のヘッドラインと違い非常にシンプルな名詞句構造であり、内容は本文記事の縮約ではなく記事の種類を列記するのみで、ヘッドラインから記事内容は読み取れない。また、ヘッドラインを使用せずに、新聞紙面に罫線で区切りをつけて新たな記事を書くといった形式も数多く見られヘッドラインの重要性が感じられない。

語彙面では、現在では“News”が一般的であるが、その代わりに“Intelligence”が使用されており、創刊当初には“News”という語は全く使用されていない。1800年の記事からは“Ship News”のように、“Ship”については“News”が使用されているが、その他の項目については1850年までを通して“Intelligence”が使用されている。

またヘッドラインの最後にピリオドが付けられていることも、現在のいわゆる“Block Language”の特徴からすると、ヘッドラインの特徴が当時はまだ確立されていないことがわかる。

次に多く見られるヘッドラインが下記のような国または地名による見出しである。

France

Ireland

PARIS, MONDAY MARCH 11

他国からの報道として、国名のみが記載されたヘッドラインや、地方からの便りとして「地名、日付」という例も数多く見られた。また、たとえば1789年のフランス革命の記事は当時、毎日のように記載されていたが、“FOREIGN INTELLIGENCE”あるいは“France”というヘッドラインが最も多かった。しかし、時には少し趣向を凝らした例として下記のような例も見られた。

CELEBRATION OF THE FRENCH REVOLUTION (15 July, 1789)

REBELLION AND CIVIL WAR IN FRANCE (20 July, 1789)

THE ASSAULT OF THE BASTILLE (18 August, 1789)

このような名詞を等位接続詞や前置詞で結ぶ構文のヘッドラインは当時は数少ない。

また、以下のような人物、当時の関心事などを名詞句で表現したヘッドラインも見られた。

THOMAS PAINE (30 July 1791)

LORD NELSON (14 November 1805)

THE RIGHTS OF MAN (28 September 1792)

NEW TAXES (15 March 1798)

FEVER IN IRELAND (14 March 1846)

語数の多いヘッドラインは非常に稀であり、下記のように動詞を使わない名詞句のため、非常に冗長な印象を受ける。

PROTEST OF LORD ERSKINE AGAINST THE PASSING OF THE  
NEWSPAPER. (1 January 1820)

DISPERSAL OF THE REFORM-MEETING AT MANCHESTER BY A  
MILITARY FORCE. (19 August 1819)

このような *The Times* の動詞を使用しない変化に乏しいヘッドラインが当時継続して使用されていたことについて、*Sunday Times* の編集者であった Harold Evans は、Evans(1974:2)において、“There was no finite verb in the headline, ... *The Times* did not develop its early innovation, nor was it copied in England. Some English newspapers did let the verb into the headline.” と批判的に論じている。

ところで、ヘッドラインについてCrystal(1988:382)は、“The Headline is critical, summarizing and drawing attention to the story.”と特徴づけ、またEvans(1974:Preface)は、“Headlines excite emotion.”とヘッドラインの特徴について述べている。またReah(1998:17)は、“Headline writers use a range of language devices to make their headlines memorable and striking.”としている。このような観点からすると、当時のヘッドラインは全くその様相を呈しておらず、現在のヘッドラインとは全く異なった無味乾燥なヘッドラインといえる。

以上のように、1785年から1850年の特徴としては、記事の種類の明記に留まり、名詞句の羅列であり、特にヘッドラインの重要性が意識されていないということである。また語彙面の注目点としては、“News”の代りに“Intelligence”が使用されていることであろう。

### 3-2 1850年から1899年

次に19世紀後半の50年について考察を加えることにする。紙面は12頁と非常に多くなり記事は増えるが、創刊当初と同じく、はじめの数頁は広告の羅列である。最も多いヘッドラインが、“FOREIGN INTELLIGENCE.”、“LATEST INTELLIGENCE.”であり特に変化はない。敢えて記述するなら、“COMMERCIAL INTELLIGENCE.”や、“MILITARY AND NAVAL INTELLIGENCE.”、“ELECTION INTELLIGENCE.”のように、記事の種類はかなり多くなっている。さらに新しく登場するものとして下記のような例がある。

SPORTING INTELLIGENCE. (以下下線は筆者)

AMERICA.

UNITED STATES.

スポーツニュースが登場する。現在の“SPORT NEWS”と違い、単語のワード数が多いこともあり軽快な印象はない。また、“AMERICA”も、アメリカの発展と共に頻繁に登場するようになり、独立後は“UNITED STATES”として登場する。他の例を列記してみると下記のようなものである。

THE WAR.

THE FAMINE IN IRELAND.

ASSASSINATION OF LORD F. CAVENDISH AND MR. BURKE.

実は、特徴的なヘッドラインを探してみても全く見つからないのである。1860年1月1日と1880年1月1日の新聞を比較してみると、ヘッドラインについては20年も経過したとは思えないほど全く形式が同じであり、変化が見られないのが特徴であるといえよう。

19世紀後半から20世紀にかけては大衆紙が相次いで創刊されているが、*The Times*のヘッドラインについて殆ど変化は見られない。

Straumann(1935:96-97)は、ヘッドラインの歴史的な考察の章において下記のように

述べている。

But more important than these forms is the fact that the possibility of an early nineteenth-century headlines was actually there without, however, being developed... At any rate, from the point of view of the headline reader, the newspapers of the first half of the nineteenth century look extremely dull on the whole.

これは一般的な当時の新聞についての記述であるが、当然ながら *The Times* も同じ傾向にあることがわかる。19世紀のヘッドラインは特に取るに足らないものであると言えよう。ヘッドラインの構文は、名詞のみ又は名詞句で特に前置詞 “of” を使用したものが大半であった。

### 3 - 3 1900年から1950年

次に20世紀前半の50年の変化を考察する。この時代になると徐々に変化の兆しが見えてくる。1900年から数年はほとんど変化がないが、1912年に起きたタイタニック号沈没の事件については、イギリス人にとって最も関心の深い記事であったようであり、日々刻々と変化する報道内容と共にヘッドラインも多少の変化を観察することができる。

PLIGHT OF THE VESSEL (16 April, 1912)

ICEBERGS IN THE ATLANTIC (16 April, 1912)

THE KING AND QUEEN'S SYMPATHY (17 April, 1913)

文構造としては従来と代わりがないが、“sympathy” のような感情的な語彙も使用されるようになっていく。また新たな試みとして動詞が登場する。

TITANIC SUNK. (16 April, 1912)

HOPE OF FURTHER AID ABANDONED. (17 April, 1912)

DETAILS STILL LACKING. (17 April, 1912)

ONLY 868 PASSENGERS PICKED UP. (17 April, 1912)

上記の例は、受動態としてのbe動詞の省略形あるいは形容詞句と考えられるが、いずれにしても動詞を使用することで、より躍動的な印象を受けるヘッドラインへと変化している。これは当時としては依然として稀な例であり、名詞句ヘッドラインが主流であるが、変化の兆しを感じる例である。また、第3番目の例のように、“only 868 passengers” という具体的な表現も新たな特徴であるといえよう。また他の例としては、下記のようなものがある。

FRANCE INVADED. (3 August 1913)

WAR DECLARED. (5 August 1914)

DUST REPLACES MUD. (10 June 1915)

従来は、“FRANCE”、“THE WAR”と1語で示されていたものに動詞が加わるようになっていく。“WAR”の前の冠詞が省略され、簡潔になっていることも注目に値する。Quirk *et al.* (1985:1313)は、“The omission of the articles is one of the devices used in headlines...”と冠詞の省略についてはヘッドラインの特徴として採り上げている。以後、ますますこの傾向は多く確認されることになる。

次に、1920年1月1日の記事を見ると、ヘッドラインの活字のポイント数が大きくなり、また挿絵が登場することにより視覚的にもかなり見やすい新聞となっている。さらにヘッドラインは以下のような形式を採り、読者の目を引くレイアウトとなった。

THE MOULDERS' STRIKE.

CONFERENCE TO BE

RESUMED. (1 January 1920)

まず大見出しがあり、その次に罫線で区切り中見出しが表示されている。その他の例を下記に、「大見出し—中見出し」という形式で表示した。

FRANCE'S COAL PROBLEMS. — CONGESTION AT THE PORTS.

“ROLLS-ROYCE OF AMERICA.” — NEW CHASSIS FACTORY IN  
MASSACHUSETTS.

TO SAVE SIBERIA FROM CHAOS. — JAPAN'S INTERVENTION.

従来は、前置詞OFを使用した表現が大半であったが、属格の表現に変化していることがわかる。また具体的な内容のヘッドラインが急激に増加している。

この頃になると“INTELLIGENCE”という表現は消滅している。それに代わり“News”が使用されている。

Sporting news — HUNTING LEAGUE FOOTBALL GOLF

上記の“Sporting news”のような見出しは大見出しとなり、その下位区分として具体的な競技の中見出しになるという現在と同じ形式に変化している。

また別の特徴的な表現に以下のような例がある。

“YOU MUST SIGN” (31 May 1919)

WHAT CAN GERMANY PAY? (28 September 1922)

引用符を使用したヘッドライン、また疑問文のヘッドラインが初出するのである。1940年になると、挿絵に加えて写真も掲載されるようになり、ヘッドラインにもまた新たな変化の兆しが見られる。

Imperial and Foreign — HITLER ENRAGED BY BRITAIN

“ALL OUT” AID FROM U.S. — TWO DISSENTIENTS

TWIN MOVEMENT IN JAPAN — NEW POLICIES ABROAD AND AT  
HOME

ヘッドラインの活字はさらに大きくなり、紙面のスペースの都合で“News”が省略されることや、“United States”と表現されていた見出しが“U.S.”のような省略形で表示されているのも注目に値する。この省略形の普及について、Barber(1964:97-98)は“The Growth of the Vocabulary”の章で“Initials”という節を設けて、英語の歴史的変化における一つの特徴として採り上げている。

以上のように、20世紀の前半は、徐々に躍動的なヘッドラインへと変化する兆しを見せた時代であると言えよう。

### 3-4 1950年から1999年

最後に、1950年以降から現在に至るヘッドラインについて考察する。1960年1月1日の記事からヘッドラインを列挙する。

STUDENTS PUT ON REGISTER

M. PINAY TELLS OF SPILT WITH MINISTERS

SOVIET WRITER SAYS IDEOLOGY IS NOT ALL

SANDO RUNS IN KENT RACE

FACING RACING JUNIOR FAILS

まず、能動態の動詞が多用されていることが特徴であるといえよう。従来は受動態あるいは名詞を修飾する形容詞句と判断される分詞の使用が大半であったが、この頃からは能動態へと変化している。

ところで、新聞各社は、新聞の文体を統一する為に、執筆する記者に対するスタイルブックを作成している。*The Times*のスタイルブックであるJenkins(1992:10)の中のヘッドラインに関する項目の全文を引用して考察することにする。

#### HEADLINES

Headlines are journalism at its most refined. They must encapsulate both the message of an article and its stamp of quality. They are acutely vulnerable to mistakes, solecisms and clichés and require greater attention than any text. The old rules are the best: always use a noun and an active verb; avoid adjectives and modifiers; use concrete not abstract nouns; express one message, not two linked by a tired conjunction like “as” (unless the link is dramatic: “Nero fiddles as Rome burns”). Omit titles and try to avoid definite and indefinite articles, numbers and initials. Above all, avoid headline clichés: “get under way”, “set to”, “looms”, and hyperboles such as crisis, crash, snub, hit, slam.

ヘッドラインについては動詞、名詞、形容詞や修飾語、接続詞あるいは冠詞の用法につい

て厳しい条件を設けているのである。時代的に概観してみると、この20世紀後半になってはじめて、このようにヘッドラインの重要性が明確になってきたことがわかる。特にこの1960年には大衆紙で人気の高い*Daily Mail*、1964年には大衆紙としての*The Sun*が相次いで創刊されていることもあり、従来の単純なヘッドラインでは読者の注目を向けることができないことも悟ったのであろう。

*The Times*は、その世界的な知名度にもかかわらず、発行部数は常に伸び悩んできた。この問題について歴代の*The Times*の編集長は様々な趣向を凝らしてきた。Ian Robinson (1973:99-145)は、その*The Times*の変化について“The Vulgarization of ‘The Times’”という論文の中で鋭く指摘している。特にこの20世紀後半の変化について、“The Times has been twice revolutionized since 1965 ...”とし、紙面のレイアウト、ページ構成の変化とゴシップニュースのスペースの拡張を挙げている。さらに文体については“Prose style was pepped up.”とし、これにより、“By a not very strange coincidence *The Times* shared that last headline with the *Daily Mirror*.”と*The Times*が大衆紙と同じようになってしまったと嘆いている。最後の章では以下のように述べている。

The Times lost its ‘sense of responsibility’ and its picture of the world at the same moment of 1966 in what I have been calling the disintegration of its ‘total language’. It is perhaps surprising that the old Times survived so long into the anti-elite age; and certainly it needed to change. ... Bell’s determination that the paper appeal to ‘the better educated portion of the public’ had descended into the nauseous slogan TOP PEOPLE TAKE THE TIMES. (Ian Robinson 1973:143)

このように、発行部数を伸ばす為の変化に批判的な見解を示しているのである。

さて、話を戻して1960年以降のヘッドラインを考察してみることにする。1980年1月1日の新聞では以下のような例が見られる。

Mr Brezhnev ‘lied to White House’ over Afghan coup  
200 Soviet troops believed killed  
Chief constables seek tougher penalties on ‘hit and run’ drivers  
Dr Waldheim to meet minister in Teheran  
US help for Afghan rebels threatened Russia, Pravda says

この1980年以降のヘッドラインは、現在のヘッドラインと同じ構造をしている。上記の第1番目のヘッドラインが、当日のトップニュースとして最も大きな活字として登場する。このようにトップニュースが決定されるのも当時からの特徴であるといえよう。また、19世紀のヘッドラインでは前置詞は“of”あるいは“in”で結ばれた構造が大半を占めていたが、この頃になると短いスペースの中に内容を凝縮するために、“over”、“on”、“for”

などの前置詞が効果的に使用されているのがわかる。

最後に1999年1月1日のヘッドラインを列挙する。

Euro dream transformed into reality

Blair says class war is over

African driver may be charged

US workers set to break power strike

Petrescu comes to Chelsea's aid

上記の第1番目のヘッドラインがトップニュースであり、第2番目以降は順に、“Britain News,” “World News,” “Business News”そして“Sport News”である。非常に簡潔明快に、ニュースの核心を表現していることがわかる。ヘッドラインをみただけでニュースの内容が明確に想像できるのである。1980年と文構造についてはほとんど変化は見られないが、使用されている動詞をみると、トップニュースの“set”や“come”など、より簡潔な語を好んで使用する場合が多くなっているのがわかる。

以上のように、20世紀後半から現在に至る時代は、ヘッドラインの最も激しく変化した時代であることが検証された。

#### 4. おわりに

*The Times*のヘッドラインについて、通時的な変化の考察を試みたが、英語の歴史という観点に立つと200年間という非常に短い期間であり、言語の変化として特に多大な変化が起こった時代とは言えないが、新聞の言語という言語使用域の特にヘッドラインという範疇だけを採り上げてみても語彙面、文構造面に様々な変化が検証された。特に、この50年間には顕著な変化が考察されたが、その理由として、近年のラジオ、テレビなど多様なメディアの発達と共に、読者が情報収集する手段としての新聞の役割が変化したことが大きな要因であることは言うまでもない。現在のような慌しい時代において、新聞は、じっくり腰を据えて読む読者の為だけでなく、ヘッドラインを見るだけで日々の最低の情報を手に入れることができるという読者のニーズが重なって、近年のヘッドラインは急激な変化を遂げたのではないだろうか。また英語自体、時代の様々な影響を受けて、言語使用域をさらに拡大しながら日々、確実に変化しているといえよう。

## References:

- Barber, Charles. *The English Language: a historical introduction*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Barber, Charles. *Linguistic change in Present-day English*. Alabama: University of Alabama, 1964.
- Biber, Douglas *et al.* *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman, 1999.
- Burchfield, R.W. *The New Fowler's Modern English Usage*. Revised 3rd ed. Oxford: Clarendon, 1998.
- Crystal, David. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: Cambridge UP, 1988.
- Evans, Harold. *News Headlines*. London: William Heinemann Ltd., 1974.
- Fasold, W. Ralph. *et al.* *Language Change and Variation*. John Benjamins Publishing Company, 1989.
- Jenkins, I. *et al.* *"The Times" guide to English Style and Usage*. London: Times Books, 1992.
- Mardh, Ingrid. *Headlines: On the Grammar of English Front Page Headlines*. Lund: CWK Gleerup, 1980.
- Quirk, Randolph. *et al.* *A Comprehensive Grammar of The English Language*. London: Longman, 1985.
- Reah, Danuta. *The Language of Newspapers*. London: Routledge, 1998.
- Robinson, Ian. *The Survival of English*. Cambridge: Cambridge UP, 1973.
- Straumann, Heinrich. *Newspaper Headlines :A Study in English Method*. London: Unwin Brothers, 1935.